

# 2021年 6月 20日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「イエス、故郷に帰る」 マタイによる福音書 13章53-58節 高橋彰

## ◆ナザレで受け入れられない

13 53 イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、54 故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。55 この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう。」57 このように、人々はイエスにつまづいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い、58 人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

イエスはたとえ話を用いて、ガリラヤの民衆に天の国について教えられました。それは人びとの生活に根差した題材を用いられながら、その日常の中に起きている驚くべき神の働きかけ、天の国の到来について語られていました。そしてその天の国は、これらのたとえを語られたイエスという方を通して人びとの前に到来しているのであり、イエスを信じて受け入れ、従うことを決断させる投げかけであり、招きでもあったのです。それは目の前で日常的に起きている現実の種蒔きや農作業や収穫を通して神の働きを想像させられるように、この世に具体的に生きたイエスという一人の方を通して神の働き、呼びかけ、招きが起きているのであり、譬えを聞いた者たちは、もちろんわたしたちも、イエスという方を通してわたしたちに届けられた神の言葉、天の国の招きを信じ、その招きに応えて生きるように呼びかけられているのです。

イエスはこれらのたとえを語られた後、つまり各地でみ言葉を伝えられた後、故郷（父の家という意味の言葉で、生まれ故郷、生まれた町を指します。）に帰られたとあります。マタイはその地を「ナザレ」という村だと記しています。（2:23、4:13、21:11）。イエスは「ナザレの人」（2:23）、「ナザレのイエス」（26:71）と呼ばれていました。ガリラヤ地域の小さな村で何の特別な歴史やしるしがあったところでもありません。旧約の諸文書に一度も名前が出てこないのですから、神の民イスラエルの歴史においても特別視される場所ではない、山の上の小さなユダヤの民の町でした。ヘブライ語 *nzr* は守るという意味を持つので、他の民との境界周辺にある辺境の地域を想像もさせます。またマタイ2:23では *nzr* は「若枝」（イザヤ11:1、ゼカリヤ6:12）や、ナジル人（民数記6:1-21）などとの語呂合わせを想起させもします。しかし「ナザレから何か良いものが出るだろうか」（ヨハネ1:45、46）というように、特別なことが期待されない、預言者たちの伝統もない、小さな町でした。

イエスは故郷ナザレに帰られました。なぜ帰られたのか。そしてこの帰郷がイエスにとっては最後であり「父の家」との

決定的な別離ともなりました。（創世記12:1）。

マタイの記述からは父（ヨセフ）はすでに他界して、いなかったようです。12:46からのエピソードでも「母と兄弟」たちがイエスの許を訪ねています。マルコでは「マリアの息子」（マルコ6:3）と書かれます。父の名をつけて呼ばれるのが通常の社会で、母の名を冠して呼ぶのは父不在であることや、時にはルーツ不詳であることを含み持たせた蔑称の意味でもありました。マタイは「マリアの息子」を「大工の息子」と記し替えています。マリアと兄弟4人の名前、そして姉妹たちもいたことが記されています。

イエスは他の町々でしたように、彼らの会堂で教えられました。ここでもイエスの語る言葉の内容と権威に人びとは驚きます。しかし他の町々と違っていたのは、イエスの教えの言葉やその内容を考える以前の理由でした。人びとが見て知っているイエスの幼き日、若き日の記憶やイエスの家族背景などでした。自分たちと同じ町で育ち、親兄弟たちまでもよく知っている。だからこそ、ナザレの人びとはイエスに「つまづいた」と言います。そしてイエスは故郷への帰省を、有名人や偉大な預言者ぶった態度で凱旋したのではなく、ありのままの姿でおられたのだろうとも想像されます。

もしイエスと実際に会えば、目の前で教えを聞かされ奇跡を見れば信じるだろうが、間接的に話を聞くだけでは信じられない、などという人びともいます。しかし実際には、目の前でよく見て、知っている人たちこそ、その情報や先入観、また目の前の断片の事実や出来事に縛られてしまい、イエスの言葉と業を通して神と出会うことが出来ず、イエスを信じて従う者となることを受け入れず拒みました。それを「不信仰」と表現されます。ナザレの人びとも、ガリラヤの民衆も、そして弟子たちでさえも、イエスの十字架への歩みに直面したとき、つまづき、裏切り、逃がりました。以後イエスは故郷と会堂を去り、ご自身の道、人びとを救うための十字架への道を進んで行かれます。